

震災特集 ②

編集企画主査 坂井康人

編集企画担当 丁班 山口茂、瀧澤綾

東日本大震災

— 災害リスクマネジメント —

記事1

想定外について(On Unpresumed)

想定外とは

東日本大震災は、想定をはるかに超える被害をもたらした。メディア、政府や原発事故関係者は、津波の破壊力に対して「想定外」ということを繰り返し繰り返した。しかし、災害にかかわる専門家が「想定外」を語るとき、さまざまな思いや疑念が交錯する。3月23日、土木学会、地盤工学会、日本都市計画学

会は、会長名で緊急声明を発表した。「(前略)今回の震災は、古今未曾有であり、想定外であると言われる。われわれが想定外という言葉を使うとき、専門家としての言い訳や弁解であつてはならない。このような巨大地震に対しては、先人がなされたように、自然の脅威に畏れの念を持ち、ハード(防災施設)のみならずソフトも組み合せた対応という視点が重要であることを、あ

らためて確認すべきである。(後略)」。この声明には、科学技術の進歩により、自然の脅威に対峙することが可能であり、ハード、ソフト技術を駆使することにより、自然災害から人間社会を守るという確信と決意がみえつつある。柳田邦男は、東電の清水正孝社長の「想定を大きく越える津波だった」という発言を受けて、「想定外」とは何なのかを厳しく問うた。柳田は「想定外」の

意味には、A…本当に想定できなかった、B…ある程度想定できたが、データが不確かだったり、確率が低いと見られたりしたために除外された、C…発生が予想されたが、その事態に対する対策に本気で取り組むと、設計ががかりになり投資額が巨大になるの、そんなことは当面起こらないだろうと楽観論を掲げて、想定の上限を線引きしてしまった、場合があるという。さらに、新聞紙面からこれらのケースが該当する事例を取り上げ、「想定外」という言葉の虚構性について断罪している。

しかし、あらゆる設計行為や計画行為は、超過外力や社会経済状態等の想定の下でのみ可能であり、いくらシナリオを描いても、その外側、すなわち想定外のことが起こりえる。さらに、われわれには想定できないような災害が、将来発生する可能性がある。われわれは、「どのようなリスクに直面しているのか」について十分な知識を持つてゐるとは限らない。「これから起こるかもしれないこと」と「私たちが知っていること」の間には、乗り越えがたい想定外の壁が存在している。

想定外の壁

貞観地震は、869(貞観11)年に

表1 宮城県気仙沼市の危機管理課の3月11日のツイート内容

14:55:18	宮城県沿岸に大津波警報高台に避難
15:02:21	大津波警報発令 高台へ避難
15:03:10	大津波警報 予想される津波高6m すぐに高台へ避難
15:04:37	大津波警報6m すぐに高台へ避難
15:05:25	津波は八日町まで来ています すぐに避難
...	...
16:23:18	第2波は大きいという情報があります。すぐに避難してください
...	...
17:53:22	市内各所で火災発生中 すぐに避難
...	...
19:37:08	福島県沖で地震発生身を守ってください
...	...
22:24:30	また津波がきてます。避難所から離れないでください (後略)

陸奥国東方の海底を震源として発生し、大規模な津波を起こしたとされる。しかし、古地震研究における知見が、東日本大震災に対する事前の備えに生かされることはなかった。ひとたび社会が災害に対する想定をつくり上げてしまうと、科学技術といえども、それを変えることは難しい。柳田による想定外の定義に対して、D…社会通念上、非現実的とみなされて、そのリスクが顧みられなかった、場合を追加したい。

社会的通念とは、人びとの想定に

関する均衡状態であり、ひとたび到達すると抜け出すことが難しくなる。想定外の罫(わな)といってもいい。一つのおとぎ話を考えよう。タイムマシンを利用して、東日本大震災が起こる前の時点に、タイムスリップしたとしよう。誰も、そのことを知らない。東日本大震災の発生を、人びとに正しく伝達できるだろうか？ 科学技術的な知見であつても、そこに不確実性や曖昧性が介在するため、社会的通念と一致しなければ、二つの意見として脇に追いやられてしまう。タイムマシンでやってきたあな

たの意見を誰も聴かなかったように。われわれは、「知らないこと」を知ることができない。「知らない」ということも、知ることができない。想定外のことを想定する能力には限界がある。想定

の壁である。この限界を克服するためには、知らないことを知るように努力するしかない。それが学問の役割である。しかし、学問でさえも、その学問が何を知ることができようと、社会に受け入れられない限り、一つの学説にすぎない。想定

の壁を克服できるかどうかは、社会が新たな学術的、技術的知見を受け入れ、社会的通念を修正するように動機づけられるかという点に集約される。そのために、人びとの専門家に対する信頼を醸成し、社

会における健全なコミュニケーションを実現することが重要な課題となる。

情報の壁

東日本大震災はさまざまな壁をつくった。地震の発生とともに、国土は被災地と非被災地に分かれた。被災地内においても、さらに被災した人とそうでない人に分かれる。被災地の外側にいる人間には、被災地で何が起つて

いるかがわからない。被災地の人間は、被災地の外側にいる人間が、自分たちの被災状況をどの程度知っており、どのような救援活動が開始されたがわからない。被災地と非被災地の間に、情報の壁がある。このような壁は、日本国内と国外の間にも存在した。

ニューオーリンズ水害やハイチ地震のように、情報の壁が人びとの不安をかりたて、犯罪や暴動が発生したという事例は少なくない。被災地という内側と、非被災地という外側の間に、知識や情報、心理状態に関して越えがたい壁が存在する。問題は、災害時に現れる壁により、内側と外側の間にどのような知識・情報や心理状態の格差が生まれるのか、それがどのような集団的なダイナミズムをもたらすかである。危機的な状況のなかにおいて、い

に多様な価値や利益を相互に尊重しながら、全体のバランスのなかで内側と外側の間の格差を解消するのが問われる。

災害時には、人びとは、多様なコミュニケーション媒体を使って情報の壁を克服しようと試みる。とりわけ、東日本大震災においては、フェイスブックやツイッターというソーシャルネットワークワーキングサービス(SNS)が重要な役割を果たした。表1は気仙沼市の危機管理課が発信したツイートの内容を示している。図1には、その情報がリツイートされていく過程を示している。このように内側にいる人びとは、さまざまなメッセージを発信し、「外側にいる人びとが助けに来てくれる」ことを信じた。さらに、外側の人びとは「内側にいる人びとが助けを待っている」ことを信じた。信頼のコミュニケーションは、以上の1次的な関係にとどまらない。内側にいる人びとは、「外側にいる人びとが『内側にいる人びとが助けを待っている』ということを信じている」ということを信じた。また、外側の人びとは、「内側にいる人びとが『外側にいる人びとが助けに来てくれる』と信じていること」を信じたのである。このような相互関係は、さらに高次に深化し、無限に展開していく。このような無限の繰

り返しを通じて、信頼のコミュニケーションが形成されるのである。内側の人びとと外側の人びとは、直接のコミュニケーションは遮断されていたにもかかわらず、信頼関係を通じてコミュニケーションが成立していたわけである。信頼のネットワークを通じて、人びとは内側と外側の間にある壁を乗り越えることができる。

減災の思想

近代市民社会は、個人の理性と自由意思に基づく合理的選択を前提として成立する。個人は外的世界の諸々の事象、すなわち客体の間にある原因と結果の間に存在する法則性を認識する。個人は、自由意思により、法則性を参照しつつ、外的世界へ働きかける。通常の理性と判断力を備えた人間であれば、適切に回避できる災害に対しては、自分の意思と責任でそれを回避しなければならない。しかし、東日本大震災では、通常の理性と判断力を持つた人間であつても因果関係を把握できず、それゆえ、想定外の災害が起こりえることを改めて認識させられた。

東日本大震災では、防波堤や防潮堤などのハードだけでは、被害を完全には抑止できなかった。1000年には

一度発生するかどうかという大規模災害に対しては、被害の発生を防止するという防災の思想だけでは限界があり、被害の増大を可能な限り抑制しようとする減災の思想に立脚せざるを得ない。減災の思想は、われわれが叡智を尽くしても制御しきれない大規模災害が発生するという土木技術の限界を謙虚に受け止めることを意味する。それと同時に、想定の外を越える災害が起こった場合でも、「自分の命を護る」という最低限の選択の可能性を保証するという宣言でもある。近代市民社会は、個人の尊厳と自由意思を最大限に尊重し、個人の合理的選択を前提として成立する。災害という危機的状況においても、「（最低限の）自由な選択を保証する」という近代市民社会の存在論的枠組みを堅持する。それが減災の思想である。

そして復興へ

災害時には、善意や助け合いの精神に支えられた多くのボランティア組織が生まれる。災害時における日本人の行儀のよさや秩序の良さに対する海外メディアの賞賛に対して、多少の面映ゆさを感じつつも、誇りに思った日本人は少なくない。東日本大震災という

不条理に直面し、悲嘆のなかにも自分の不幸をしつかりと抱きしめ、無気力や暴力とは無縁に折り目正しく、なすべきことを着実にこなし、復興に向かつて一歩ずつ歩を進める。このような被災者のありようは、世界の中で際立つて特別なことかもしれない。人びとの強さとしなやかさ、人と人とのつながりを大事にし、知恵や知識に支えられて、たくましく着実に生きていく。それは、伝統的な日本社会のありようであり、リスク時代における一つの豊穡な社会像を世界に示すことでもある。禅語『續燈録』は「松柏千年の青、時の人の意に入らず。牡丹一日の紅、満城の公子酔う」と説く。牡丹の

一時の艶やかな花に、満都の貴公子達
は酔いしれる。松柏の青が人の目をひくことは少ない。寒風吹きさすさぶ候となれば、今まで目立たなかった松柏の不易の美しさが改めて見直される。東日本大震災の被災地の1日も早い復興が希求されるなか、時を経ても変わらない信頼のネットワークを支えとする力強い復興の鼓動が聴こえることを信じてやまない。

フェロー会員 小林 潔司 京都大学経営管理大学院教授

参考文献

(1) 柳田邦男「「想定外」か? ―問われる日本人の想像力、文藝春秋、5月号、126頁、133頁、2011年

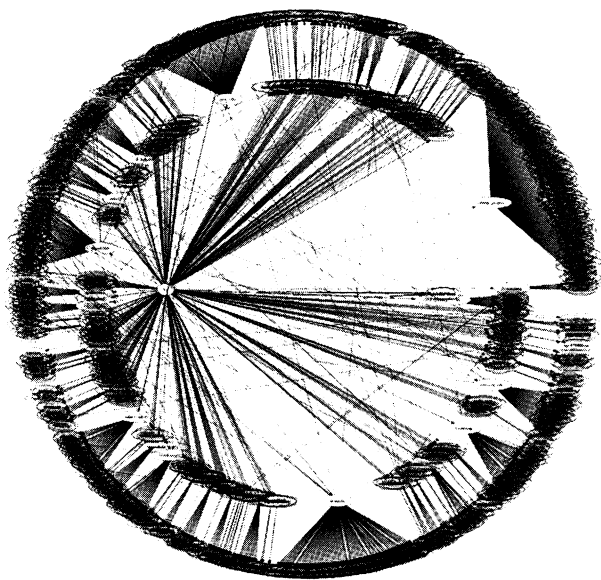


図1 危機情報のツイート・リツイート過程（中央左側の円が気仙沼市の危機管理課。二つの環の間の矢印は1次のリツイート関係を示している。）